

災害調査報告

平成 18 年 7 月豪雨による九州南部の水害 Flood disasters in southern Kyushu caused by the heavy rainfall in July 2006

○ 川池健司・中川 一・馬場康之
○ Kenji Kawaike, Hajime Nakagawa, Yasuyuki Baba

From July 15 to 24, a front stagnated over Japan, and the heavy rainfall was brought. In the southern Kyushu, total rainfall amount during 6 days reached to more than 1,000mm in some areas. The damage of the Sendai River and Kuma River basins was serious. Especially the Sendai River basin was severely and uniformly damaged from the upstream to the downstream. In this river basin, five people were killed by sediment disasters and more than 2,000 houses were submerged in total. At four observatory stations, water level of the Sendai River exceeded the design high water level.

1. はじめに

2006 年 7 月 15 日ごろから日本列島上空に停滞した前線により、全国各地で洪水氾濫や土石流などの被害が相次いだ。とくに被害が大きかったのが長野県、島根県、九州南部の熊本県、鹿児島県などである。本報では、このうち九州南部の、とくに川内川流域の被害について報告する。

2. 調査結果

調査は、10 月 2～3 日、球磨川および川内川流域の主要な被災地について行った。

(1) 川内川流域

川内川流域では、河川の氾濫や土砂災害により死者 5 名が出た。浸水家屋は床上・床下がそれぞれ 1,812 戸と 492 戸に達し、流域管内の 3 市 3 町では、約 5 万人に避難勧告等が発令された。国土交通省の水位観測所では、4 箇所では計画高水位を突破し、さらに 2 箇所で危険水位を突破した。また、全水位観測所 15 箇所のうち 11 箇所では既往最高水位を記録するなど、直轄区間 117km のうち、上・中・下流部がまんべんなく被災した。とくに川内川流域では、本川河道内の狭窄部や堰や湾曲部をめぐって上流側住民と下流側住民の意見の対立が見られたり、ダム操作の見直しが議論されたりするなどの難しい問題が残されていた。また、激しい洪水流の流下のため、堤外側の河道護岸が各地で被害を受けていた。

(2) 球磨川流域

球磨川流域の被害は、床上・床下浸水家屋がそれぞれ 41 戸および 39 戸に達した。また、910 世帯 2,097 人を対象に避難勧告が発令された。球磨川本川と支

川の合流点付近において、本川水位の上昇による支川洪水の溢水が多くみられた。また、被災した集落の住民の多くが高齢者という特徴がみられた。

3. おわりに

今回の豪雨災害の特徴としては、累積雨量がすぎまじかったことが直接の原因であり、本川と支川との合流点付近に立地する集落（しかも住民の多くが高齢者）をいかに洪水災害から守るかという難しい問題を提起している点が挙げられる。さらに、ダムや堰や狭窄部などが、河川の洪水にどのような影響を与えているのかを、正しく分析することが重要である。



図1 虎居地区(1階部分がほぼ浸水し、1ヶ月が経過しても家財道具等が入れられない状態の家屋)



図2 河川堤防の被災(堤防の堤外側が崩壊している)